

「天国人」として生きる

(ピリピ^三・一七～二二)

「刹那(せつな)」と言うことばがある。もともとは仏教における時の最小単位であり、ある解説によると指一弾き(＝弾指)は六五刹那にあたるという。他の解説では一牟呼栗多は三十分の一日、一蠟縛は同じく三〇分の一牟呼栗多、一怛(た)刹那は六〇分の一蠟縛、そして一刹那は一二〇分の一怛刹那だとある。今の単位で言えば実に七五分の一秒、瞬きよりも早い。そこから転じて出たのが「刹那的」ということば。今が良ければ良しとして享樂的に生きるさまを指すのだが、現代社会に刹那的な二オイを感じるのには私だけではあるまい。

閑話休題。この個所においてパウロは二つの生き方を提示している。一つは「十字架の敵」としての生き方であり、もう一つは天に国籍を持つ、十字架のイエスに従うクリスチャンの生き方である。今日はこの対照的な二つの生き方を見、私たちクリスト者の生き方について否定的、肯定的の両面から考えたい。

一、現世的な生き方ではいけない

一八節において涙ながらに十字架の敵の存在について語ったパウロは彼らの運命を「滅び」だと断罪する。注解者たちはこの「十字架の敵」とはパウロとは異なり、自分は既に真理に達したと自称していた人を指すといひ、そういう輩の神は実に自らの欲望であると喝破する。興味深いのはここで「欲望」と訳される言葉である。これは意識であり直訳は「腹」である。時に「腹」は日本語でも「腹黒い」とか「腹に一物持つ」など人間の感情の座としての意味を持つが、ギリシャ語においても腹には人を突き動かす原動力があると考えられていた。しかしこの文脈に書かれているのはネガティブなものであるので学者たちは彼らの腹にあつたものはある種の「肉の欲」と捉えて「欲望」という訳が付けられたといふことになる。確かに「自分はもう十分だ」と思ったら、人間はそこで止まってしまうし、そうすると希望も無くなるので、結果現世的、刹那的な生き方に傾斜するといふのはある意味自然の成り行きである。残念なことだが私たちの世界には今も変わらず「今さえよければ」といふ刹那的、現世的な価値観が溢れかえっている。そうした世界にあって教会が妥協することは決して許されないのである(参ロマ^二・一、二)。

二、主を待ち望んで生きる

対して十字架に生きる者の生き方には希望がある。キリストに捕えられたことにより、信者はもれなく新しい国籍を得る。それが天国人である。これは決定的なアイデンティティの転換だ。もはや日本人、中国人、韓国人、アメリカ人等々であることは関係ない。イエスを信じる者は罪赦され、聖霊によって神を父と呼ぶ特権に与り、全ての国境線を越え、天の御国の国籍を得るのである。しかし日本国民であることが私たちに権利(例：生存、教育、参政)と同時に義務(例：勤労、納税、教育)を与えるように天国民にはそれに相応しい生活様式が求められる。それこそがキリストを追い求めて生きることであり(三・一二)、またキリストが提供する最終的な救いの来臨を待ち望んで生きることなのである。そう考えると教会生活を「天国の待合室」のように考えることは全く適切ではない。それはむしろ天国へ続く競技場であり、純金のカップが飾られたピッチである。キリスト者はそこで御国の喜びを先取りつつ、それぞれの生を懸命に生きるのである。しかし私たちは恐れする必要はない。なぜなら私たちの前を歩まれるイエスは自らが十字架に着く前に既に「世に勝った」ことを宣言され(ヨハネ^{一六}・三三)、復活によってそれを現実にしたお方なのである。

* * *

である。

「改革開放」が叫ばれた八〇年代の中国。だがキリスト教に対する迫害は止むことがなかった。当時河南省の家の教会のリーダーだった「彼」の所にも公安じはやって来た。突然の拘留と入獄、執拗な拷問に加え、時にはマントウ一個、時には申し訳程度に二三本の麵が浮いている程度のスープといった粗末な食事は彼の心身を容赦なく痛めつけた。しかし彼の信仰の火は消えるどころかますます燃え上がった。後年奇跡の出獄を体験し、今や世界中でキリストを証ししている彼にインタビュアーが聴いた。「どうしたら自分を非難し、論断する人を赦せるのか」。間髪入れずに、確信を持って彼は答えた「感謝耶穌、把眼睛定睛在耶穌的身上。(イエスに感謝すること、そしてしっかりとイエスを見つめること)」。私たちの罪を十字架で贖ったイエスを見、感謝し、再臨のキリストを待ち望む時、私たちの心には赦しの力が満ちる。これが勝利の秘訣だと語る彼の名はブラザー・ユン。別名を「天国の人」という。イエスを見上げ、そこに希望を持つて歩む私たちも天国人。主の力に満たされ、強く歩もうではないか。